

(3) バラ

主要病害虫別防除方法

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
根頭がんしゅ病 (細菌)	①接ぎ木、挿し木に用いる器具は、十分消毒する。 ②接ぎ木部や根部にこぶの認められるものは定植しない。 ③育苗用土は蒸気で消毒する。本ばについても蒸気消毒が望ましい。	①定植前に土壤消毒を行う。 (例) ダズメット粉粒剤 (ガスタード微粒剤、バスアミド微粒剤)
	【参考事項】 本病は、土壤伝染、接触伝染する。	
根腐病 (<i>Pythium</i>)	①無病苗を利用する。 ②作付け前に前作の被害残渣を片づける。 ③夏季の施設内の気温や栽培ベッドの温度をできるだけ低く管理する。	登録農薬はない。
	【参考事項】 高温性の <i>Pythium helicoides</i> が病原菌である。 発生時期は主に7～9月の高温期で、特に定植直後に発生しやすい。発生は初発株から水の流れに沿って連続して多発する。 病原菌は感染苗で持ち込まれることが多く、土壤伝染と水媒伝染(病原菌の遊走子が水で移動する)をする。 アルストロメリア、ガーベラ、ペゴニア、カランコエ、キク、ポインセチアなど多数の植物に発病し、被害を与える。	
黒星病 (<i>Diplocarpon</i>)	①被害部を早期に除去して適切に処分する。 ②落葉などを早めに除去し、常には場衛生に努める。 ③密植を避ける。	①発病してからの農薬散布は効果が低いので、予防散布・初期防除を徹底する。 (例) テトラコナゾール液剤 (サルバトールME) メパニピリム水和剤 (フルピカフロアブル) TPN水和剤 (ダコニール1000)
	【参考事項】 晩春と秋季に多発する。 本病の発病適温は20～25℃で、85%以上の高湿度によって助長される。	
うどんこ病 (<i>Sphaerotheca</i>)	①発病葉は早期に除去して適切に処分する。 ②通風を良くする。 ③落葉などを早めに除去し、常には場衛生に努める。	①葉に白いかびがわずかに生じるなどの初期症状が見られたら、農薬を直ちに散布する。 毎年多発するほ場では、発生時期の直前から防除する。 (例) テトラコナゾール液剤 (サルバトールME) メパニピリム水和剤 (フルピカフロアブル) TPN水和剤 (ダコニール1000) EBI剤などは連用すると耐性菌を生じやすい。
	【参考事項】 施設栽培で発生が多い。 発病適温は18～25℃で、30℃以上では発病が抑えられる。	
べと病 (<i>Peronospora</i>)	①発病葉は早期に除去して適切に処分する。 ②通風を良くしたり、低温期には暖房を夕方早めに行うなど、多湿を避ける。 ③排水不良地での栽培を避ける。	①発病初期から農薬を散布する。 常発する施設では、発病前から防除する。 (例) アンバム液剤 (ステンレス) マンゼブ水和剤 (ジマンダイセン水和剤) マンネブ水和剤 (エムダイファー水和剤)
	【参考事項】 分生孢子の発芽最適温度は18℃で、かなり高い湿度か水滴が必要である。発病適温は15～20℃程度である。	
枝枯病 (<i>Diapleella</i>) 腐らん病 (<i>Cryptosporella</i>) すす枯病 (<i>Cylindrocladium</i>)	①被害枝は切り取って適切に処分する(健全部も含めて切り下げる)。 ②枝を傷つけないように注意する。 ③剪定に用いるハサミは、消毒(煮沸、火炎、アルコールなど)したものを用いる。剪定部は腋芽などのわずかに上部で行い、枯込みを防ぐ。	登録農薬はない。
	【参考事項】 枝枯病は茎に発生する。病斑は初め黄色から赤褐色の小さな斑点であるが、やがて拡大し中心は淡褐色、周囲は暗褐色にくまどりされる。病斑内部の表皮は収縮し、ときに裂目ができ、表面に小黑粒点(柄子殻)を生じる。 腐らん病は当年生又は2年生の茎に発生し、病斑は白っぽい淡褐色で周囲は赤紫色に縁どりされる。冬～春の2年生枝の病斑は5～10cm以上の大型になり、小黑粒点(子のう殻)を形成するが、病斑に亀裂を生じることはない。茎だけでなく、葉や花にも発生が見られる。 すす枯病は接ぎ木部を中心に茎の地際部に発生することが多い。病斑は暗褐色で大型になり、しばしば亀裂を生じ、生育を抑制し、ひどくなると株全体が枯死する。発生時期は越冬後の春先である。	

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
半身萎凋病 (<i>Verticillium</i>)	①発病株は根回りの土とともに早めに除去し、適切に処分する。 ②発病地では、蒸気などにより土壌消毒を行う。 【参考事項】 苗での持込みに注意する。	①定植前に土壌消毒を行う。 (例) クロルピクリンくん蒸剤 (クロールピクリン、ドロクロール、ドジョウピクリン、クロピク80) ダズメット粉粒剤 (ガスタード微粒剤、バスアミド微粒剤)
ミカンキイロアザミウマ	①未発生施設では苗の移動に伴う持込みに注意する。 ②施設の開口部に目合い0.4mm以下の防虫ネットを張り、侵入を防ぐ。0.8mm目合いの赤色系ネットを使用すると侵入防止効果が高まる。 ③不必要な株、花及びほ場内の雑草は本種の発生源となるので、速やかに処分する。 ④発生施設では改植時に10日以上密閉して蒸込みを行い、成虫や蛹を死滅させる。 【参考事項】 本種は花卉や芽の隙間に生息しているため、農薬は丁寧に散布する。	①発生初期から農薬を散布する。 (例) エマメクチン安息香酸塩乳剤 (アフーム乳剤) (アザミウマ類) クロルフェナピル水和剤 (コテツフロアブル) スピネトラム水和剤 (ディアナSC) (アザミウマ類) ノバルロン乳剤 (カウンター乳剤) (アザミウマ類) 薬剤抵抗性の発達を回避するため、作用性の異なる系統の農薬でローテーション防除を行う。
アブラムシ類	①施設の開口部に目合い1mm以下の防虫ネットを張り、侵入を防止する。 ②ほ場周辺の雑草にも寄生するので、除草する。 【参考事項】 春～秋まで長期間加害するが、特に春の芽、若葉、花蕾に被害が大きい。	①発生初期から農薬を散布する。 (例) イミダクロプリド水和剤 (アドマイヤーフロアブル) クロチアニジン水溶剤 (ダントツ水溶剤、ベニカ水溶剤) トラロメトリン乳剤 (スカウト乳剤) フロニカミド水和剤 (ウララ50DF)
カイガラムシ類	①卵のうをもった成虫を見つけしだい捕殺する。 ②葉や枝が込みあって通風が悪いと発生が多くなるので、枝の整理を行なう。 【参考事項】 イセリヤカイガラムシ、ヒラタカタカイガラムシ、バラシロカイガラムシ、ナシマルカイガラムシなどが寄生する。	①カイガラムシに十分付着するように噴射する。 (例) クロチアニジン・フェンプロバトリンエアゾル(カイガラムシエアゾール)
チュウレンジハバチ	①産卵中の成虫や葉に群生した若齢幼虫を捕殺する。 ②枝の産卵跡の卵を潰す。 【参考事項】 5月ごろから、年3～4回発生する。成熟幼虫は株元の落葉などの下で蛹になる。	①幼虫の発生初期に農薬を散布する。 (例) フィプロニル水和剤 (プリンスフロアブル) DBEDC乳剤 (サンヨール)
ハダニ類	①ほ場周辺の雑草にも寄生するので、除草する。 【参考事項】 バラは、品種により薬害が生じやすいので、事前に小面積で試すなどの注意が必要である。	①発生初期から農薬を散布する。 (例) 調合油乳剤 (サフオイル乳剤) シフルメトフェン水和剤 (ダニサラバフロアブル) ピフェナゼート水和剤 (ダニ太郎) (開花前まで) ピフルプミド・フェンピロキシメート水和剤(ダブルフェースフロアブル) ミルベメクチン水和剤 (コロマイト水和剤、ダニダウン水和剤) 薬剤抵抗性の発達を回避するため、作用性の異なる系統の農薬でローテーション防除を行う。 ②施設では天敵製剤を使用する (天敵製剤の項参照)。